

# 石高神社報

昭和六十二年七月日  
発行 創刊号  
題字 伊久彰雲

## 宮司就任挨拶 高原 章兆

去る四月十六日付をもって石高神社の宮司に就任致しました。昭和二十四年生れ、三十七歳で教員を兼職しております。

小さい神社の神職は、多くが社会化して、います。神主では生活できないから息子は、他の仕事をするという話をよく耳にします。私も大学を出るまでは、神職になろうとは思いませんでした。父も勧めませんでした。しかし、どうにか神職と兼業で生きる職につくことのできた時から考えが、変ってきました。これも氏神様の思し召しであつたのかもれません。生れた時から神社と共に生活してきた私は、深層意識の中で石高神社から離れられないか、たのだと思ひます。私がそうであつたように、皆様も日本人の心に何代にも渡って住みついた神道の意識が心の中に生きていると思ひま

す。至らない私ではあります。氏子の皆様のご援助をいただき、神社をお祀りし、護つて行きたいと思ひます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

石高神社の歴史は古く、約千年と推定され、現在の地に鎮座してからも約三百年になります。その間、播磨郷の総氏神として、氏子の皆様の精神的依り所として、私達の生活に根ざして共に歩んでまいりました。しかし、各所の老朽化に伴い幣殿・拜殿の修補、すでに崩れかけた社務所の建て替え、末社の整備、それらに伴う神社会計の窮乏等の大きな問題を抱えています。また、最近では新たに家々が建並び、田園地帯であつた氏子内も大いに発展し、変貌を遂げました。その結果、新しい対応も迫られています。このような時期に重大な責務を負つて宮司に就任したわけであり、氏子の皆様ならびに神社の発展を祈りながら奉仕して参りたいと思ひます。なお、身勝手ではございませんが、兼業でもあり、皆様の意に十分添いかねる面も少々生じ

てくるかと思ひます。御理解をいただき  
重由てよろしくお願い申し上げます。

## 輪くぐり

七月三十一日晚

昔から日本人は、一年の折目ごとに祓え  
を修め、神々をお招きしてお祝いをし、子  
供の成長や一家一族の繁栄を祈願してきま  
した。こうした折目ごとの祓えの行事の中  
で最も重要なのが旧暦の六月と十二月の大  
祓えです。これが輪くぐりの行事として残  
っています。輪くぐりは、年の前半の半年  
間の身の穢・心の罪を祓い清めるお祭りで  
す。

紙でできたひとがたに住所・生れ年のえ  
と・男女の別・(氏名)を書いて、息を吹  
きかけてお供え下さい。罪・穢を拂したひ  
とがたを焼いてお祓い致します。傷病平癒  
の祈願にもなります。疫神斎のお札と茅(か)を  
をお渡しします。門口につけて下さい。  
茅を家につける風習は、ある情け深い人が  
神に告げられた通り、茅の輪を作って家に

巻いたところ、そのあと疫病が流行した  
が、その家だけが助かったという故事に  
由来しています。(備後国風土記)  
何とぞ御家族お揃いでの参りをお待  
ちしております。

## 末社紹介 天

石高神社には、境内末社が十二社あり  
ます。順次簡単な説明を加えていきたい  
と思ひます。今回は天満宮です。

### 天満宮

平安初期の学者・政治家  
の菅原道真を祀る。諡(あざな)を  
を「天満自在天神」といい、同神を祀  
る神社を天満宮という。学問の神とされ  
全国に多い。左手の奥櫓の古木前に鎮座。

## 後記

石高神社をまっと知っていたたく為  
に、こうした社報を発行していく必要が  
あると思ひます。悪文悪筆を顧みず宮司  
就任を機会に作ってみました。配布方法  
も確立しておりませんが、今後年二回程  
発行する予定です。御支援をよろしく。